

ワイマル古典主義とフランス革命：ゲーテとシラーの連帯の成立

その他のタイトル	Weimarer Klassik und die französische Revolution : Die Entstehung des Bundes zwischen Goethe und Schiller
著者	芳原 政弘
雑誌名	独逸文学
巻	35
ページ	92-113
発行年	1991-05-02
URL	http://hdl.handle.net/10112/00018292

ワイマル古典主義とフランス革命

——ゲーテとシラーの連帯の成立——

芳原政弘

ワイマル古典主義は、ドイツ文学史において、ゲーテとシラー両詩人の青年期のシュトルム・ウント・ドラング運動に続く、円熟期の新しい文学活動を意味するが、その時期はおよそゲーテのイタリア旅行（1786-1788）、シラーの『ドン・カルロス』の改作（1787）から、2人の交友関係の成立（1794）を経て、シラーの死（1805）までをいい、中でも両詩人の緊密な連帯に基づく1794年から1805年の約10年間は、両巨匠の代表作がワイマルを中心に続々と生まれた画期的な時期であり、特にこの時期の文学を狭義において、ワイマル古典主義あるいはドイツ古典主義と呼んでいる¹⁾。

シラーにとっては最終の段階であるが、なお27年の余命を保つゲーテにとっては過渡的段階にあたり、さらに晩年の新たな創造へと展開していく。

もちろんこの時期はワイマル古典主義だけでなく、ジャン・パウル、ヘルダーリン、クライストの反古典主義的文学、シュレーゲル兄弟、ノヴァーリス、ティークらの初期ロマン派、そしてイフラント、コッツェブーらの娯楽文学(Unterhaltungsliteratur)、さらに当時の政治的社会的状況の変革を求める急進的・革命的なジャコバン主義文学(Jakobinische Literatur)など、多種多様な傾向を持つ多くのすぐれた詩人や作家を輩出した、ドイツ文学史上最も豊かな時代の一つである。いな文学ばかりでなく、カント、フィヒテ、シェリング、ヘーゲルらのドイツ観念論哲学やハイドン、モーツァルト、ベートーヴェンらのウィーン古典派音楽の隆盛期でもあり、およそドイツ文化全体にわたって驚くべき飛躍を遂げた、まさに黄金時代と呼ばれるにふさわしい時代であった。「詩と哲学と音楽の国」という今日のドイツ像は、この時期に由来するといつてよい。

が、このドイツ文学及び文化の黄金時代は、決して平穩無事のうちに幸せな精神生活を享受できたパラダイスの時代でなく、近代史上の最大事件といってよいフランス革命によってヨーロッパ全体が激しく揺れ動いた混乱と危機の時代である。1789年7月14日、パリの群衆が政治犯を監禁していた封建絶対主義の砦、バスティーユ獄を襲撃するところから始まるフランス革命は、当然のことながら隣国ドイツの詩人、思想家に大きな衝撃と関心を引き起こし、各人各様の反応を示した。もちろんゲーテ、シラーも例外ではない。いなワイマル古典主義の形成は、革命の時代状況に対する両者の共通の認識に基づく共同歩調あるいは共同戦線としてみることもできるのである。

大まかにいって、ドイツ知識人の多くは、革命の初期の段階において深い共鳴を、いな感激をすら表明した。しかし1792年9月の虐殺事件、1793年1月の国王ルイ16世及び6月の王妃マリー・アントワネットの処刑、そしてジャコバン党の恐怖政治（Terror）下の大量殺戮と、流血の惨事や強圧的政治の恐るべき事態が続くにしたがって、次第に懐疑的・拒否的態度に変わっていった。「この革命は、画期的意義と全ヨーロッパ的影響をもった歴史的イベントであった。封建主義の清算、市民国家の建設、市民的人権の宣言、民衆層の強力な革命的エネルギーの発露は、ドイツの政治生活にも大きな影響を及ぼした。西南地方におよそ10年間続いたドイツでの革命運動は、しかし既存の封建絶対主義体制を覆す機会をもたなかった。領土において分断され、経済的にもかなり発展の遅れたドイツでは、市民階級は全体として革命的行動に強いられることもなく、またその能力があるとも感じていなかった。ドイツの知識人の多くは、もちろんフランス革命を人類の新しい世紀の始まりとして称えたが、次第にフランスの出来事から遠ざかっていった。というのも、彼らは——自分たちの状況のゆえに、革命の事象に対して専らイデオロギッシュに関心を抱いたので、——ジャコバン党の恐怖政治の実際上の必然性を認識することができず、自分たちの市民的、啓蒙主義的理念に動揺をきたし、それゆえ最後にはドイツでの革命を恐れたのである。」²⁾ というのが、フランス革命のドイツへの影響の一般的な歴史評価といってよいだろう。

典型的な例を挙げれば、ハンブルク在住の詩人クロップシュトック

(1724-1803) は、65歳を越える高齢で、多くの革命賛歌をつくったが、すでに革命勃発前からフランスの政情に注目し、1788年末に決定した「三部会」の招集を称えた „Die Etats généraux“ (1788) の中で、「フランスの勇ましい議会の陽は早くも明け染め、／黎明の慄きが心待ちする人たちの／骨の髄にまで染み渡る。おお、来たれ、新しい／爽やかな、夢想ではない太陽よ！」⁸⁾ と歌い、「汝自身を知れ」(Kennet euch selbst, 1789) の中に、ドイツの同胞に向かって「フランスは自由をつくりあげた。今世紀の最も崇高な行為は／オリンポスの山頂に聳え立つ。……けれど、私たちは？／ああ、私の問いは空しい、ドイツ人よ、お前たちは押し黙っているだけだ。」⁴⁾ と、フランスの自由を自国と比較して称えている。しかし、1793年には以前の感激も消え失せ、「私の誤り」(Mein Irrtum, 1793) と題する詩に、「ああ、黄金の夢の喜びは去り、／私の回りにはもはや朝の輝きはなく／求愛をはねつけられたような痛みが私の心を刺す。」⁹⁾ と歌っている。

1792年8月26日、フランスの国民公会は18名の外国人(ペイン、ベンサム、ワシントン、ペスタロッチ、カンペ、シラーなど)に、フランス名誉市民の称号を贈ったが、彼もその一人だった。政治詩の中ですでにアメリカの独立と自由への共感を歌っていたが、今かねてから尊敬していた「ワシントンと同じ市民」⁹⁾ になったことは、彼にとって大きな喜びであった。この称号を贈られたのは、革命賛歌「三部会」と「殿様と妾」(Der Fürst und sein Kebsweib) が1790年にパリの新聞に翻訳され、注目されていたからである⁷⁾。彼は国王処刑後のフランスに失望を覚えたが、決してそのままではいたわけではない。1796年1月のエッセー「革命についての私の考え」(Meine Meinung über die Revolution) の中で、「フランス革命についての私の判断は、今もなお自分はそのために死ぬ覚悟がある、ということである。私が革命を起こしたわけではないが、革命はそこに存在している。だから、これを敗れて後退させようとする者に災いあれ！」⁸⁾ と自分の立場を明確に述べている。彼は革命の目まぐるしい動きに動揺しながらも、根本において深い共鳴を失わなかったといつてよい。

クロップシュトックと同年のケーニヒスベルク在住の哲学者カント(1724-1804)は、およそ「カントの政治上の著作は、その都度十分な理

由をもっていろいろな陣営に関係づけることができる。彼はその民主主義の考えによって、民主主義の理論に近いが、革命の代わりに政治的改革を優先させること、あるいは彼の三権分立のモデルは、リベラルの陣営に近い。最後に抵抗権の否定や国家権力の圧倒的な力の強調は、むしろ保守的な要素としてみる事ができる」⁹⁾ という、極めて多義的な評価を受けているが、しかし革命に好意的態度を示したことは、1798年に公刊された『学部の争い』(*Der Streit der Fakultäten*) に、「われわれの時代に目前に起こるのを見てきた、才気に富む(フランス)国民の革命は、成功するにせよ、失敗するにせよ、またそれがあまりに悲惨と残虐行為に満ちているので、思慮ある人でさえ、それを再度企てた場合、たとえうまくいく見込みがあるとしても、こんなに犠牲を払う実験なら行う決心がつかないというようなものであっても、私は言おう、この革命はしかし観察者(自分自身はこの劇に巻き込まれていない)の心情に願い通りの共感を見いだしたのであり、しかもその共感はほとんど熱狂に近く、その表現は危険とさえ結びついたのであった。それゆえ、革命は人間本性の中の倫理的素質以外の何物をも原因としているのではない。」¹⁰⁾ ……「つまり人類の歴史において、このような現象(革命)はもはや忘れ去ることはできない。というのも、それは人間の本性にある一つの素質と能力とをより良いものへ、即ちいかなる政治家も以前の事物の経過から案出できなかったものへと啓発したからである。」¹¹⁾ と述べていることから理解できる。カントはここで革命を人間本性に内在する倫理的素質・能力の一つの現れとみて、より高い次元から肯定的にとらえているといえる。

前の二人より10歳ほど年下のワイマル在住の作家ウィーラント(1733-1813)は、初めから革命に強い関心を抱き、いくつかのフランスの新聞、国民公会の論議を報道するものやジロンド派、王党派、保守派の異なった立場の新聞を読み、ドイツ内部での議論にも積極的に参加し、ことに自分の編纂する雑誌『ドイツのメルクーア』の中で、革命の経過を追い続け、この問題に勃発時から1799年まで熱心に携わった当時の「ドイツの精神的エリートの代表者」¹²⁾ とみなされている。彼はクロップシュトックのように感情をむき出しにした熱狂的な姿勢でなく、自分の理性的判断に基づき、党派的立場を越えた、冷静な観察者の態度を堅持した。ここで詳細を述べ

る余裕はないが、彼も初めは革命に対して肯定的な態度を示したことは、「絶望に陥った民衆の運動は、その性格上嵐のようになる。しかし、その結果に対して責任を負えるのは、民衆を専制的で無分別な方策によって絶望へと追いやった当の人物あるいはそのような人々だけである。」¹⁴³と明確に述べていることから分かる。しかし「革命の成り行きが、彼の啓蒙主義的歴史構想と矛盾するにしたがって、ウィーラントの革命に対する関係は、次第に距離を保つようになっていった。」¹⁴⁴のである。理性と進歩の明るい楽天的な啓蒙思想に立脚するウィーラントは、血なまぐさい革命の現実と直面して、理論と実践の矛盾に遭遇し、結局クロップシュトックと同様な態度を取るにいたったのである¹⁴⁵。

さらに10歳年少のマインツ在住の博物学者フォルスター（1754-1794）は、鋭い先見性をもって理論ばかりでなく、当時のドイツの知識人としてはむしろ例外といってよい革命の実践に身を投じ、短命ではあったが、ドイツ最初の共和国・マインツ共和国の樹立に尽力し、しかし最後に不幸にもパリで客死した人物だが、彼はバスチーユ獄攻略の二週間後に「それにしても、哲学が頭脳に熟成させたものが、国家の中で実現される有様をみるのは、素晴らしいことです。」¹⁴⁶と語り、同年末に「この専制主義と民主主義の争いは、これまでの歴史の中でこれに比べられるものはありません。この争いの攻防は独特の種類のもので、築き上げられた理性の世紀の刻印が押されています。」¹⁴⁷と述べ、いち早く革命をフランス啓蒙思想の現実化、封建専制主義から近代民主主義への歴史的転期とみる、革命の本質を的確につかんだ反響を示している。

さらに若い世代、20歳前後のチュービンゲン大学神学部の三人の友人シェリング・ヘーゲル・ヘルダーリンも、革命勃発に対して大きな感激と興奮を覚え、ともに革命記念日を祝ったことはよく知られている。22歳のヘルダーリンは、1792年6月に革命と反革命の戦いについて触れ、「フランスとオーストリアとの間では、まもなく事は決するだろう。エルベの新聞には確かにフランスは全滅したと書いているが、しかしよく気をつけるがいい。この報道は、コーブレンツ発のものだから、決して信用してはいけない。」¹⁴⁸と語っている。そしてまだ19歳のティークは、後にロマン派を代表する、およそ政治とは無縁の作品を書いた作家だが、同年11月に「あ

あ、僕がフランス人だったら、ここにじっとしていたくない。だが、残念なことに、僕は自由に対して戦いを挑んでいる君主国の、フランス人を侮るほどまだ野蛮な人たちの間に生まれたのだ。……自由のない人生とは一体何だろう。……フランスが不幸になれば、僕は全世界を軽蔑し、その力に絶望する。……そうなれば、ヨーロッパは牢獄となるだろう」¹⁹⁾と、率直に真情を吐露している。

ドイツにおいて老壯の大家から20歳の若者にいたるまで、フランス革命を大きな期待をもって異口同音に、新しい時代の幕開けとして称賛したことは、何よりもヘーゲルが晩年に語った、次の包括的な言葉がはっきりと証明している。「太陽が天空にあり、遊星がその周囲を回転して以来、人間が頭のうえに、即ち思想のうえに立ち、その思想に基づいて現実を築き上げるようになろうとは、まったく考えられないことであった。アナクサゴラスは初めて理性 (nous) が世界を支配すると語った。しかし、人間は今初めて思想が精神的現実を支配すべきであるということを認識する段階にまで到達したのである。それゆえ、これは素晴らしい日の出だった。思索するすべての人々はともにこの新しい世紀を祝った。崇高な感激がこの時代を支配し、精神の熱狂は、さながら神的なものとして世界とのほんとうの宥和がここに初めて成就されたかのように、世界を揺り動かしたのであった。」²⁰⁾

若干の人物についておおよそを述べたにすぎないが、ほとんどのドイツの知識人は、このように革命を最初から好意的に受け取り、大きな期待を寄せたのである。けれども、年齢のうえでほぼ中間に位置する壮年期、40歳のゲーテと30歳のシラーは、これとはまったく対照的な、例外ともいえる態度を示した。両者とも、まずバスターニ獄襲撃についてまったく触れていない。そして反応それ自体がきわめて遅いといえるのである。ゲーテが初めて革命について言及したのは、勃発後約8ヶ月経た、1790年3月3日付の友人フリードリヒ・ヤコービにあてた手紙の中であり、それは「フランス革命が私にとっても一つの革命であったことを、君は分かってくれるだろう。」(WA Briefe 9, 184)という、前後に何の説明もない、ただこれだけのとても簡単な、しかし何か意味深長な一文である。作品の中で初めて触れたのは、同じ1790年の2度目のヴェニス滞在時(3月末-5月)

に成立した『ヴェニスのエピグラム』(Venetianische Epigramme, 1790)の104編の中の、明らかに革命を主題とする9編(50-58番)である。ゲーテの革命に対する最初の受け取り方なので、いくつか取り上げてみよう。

50番「自由の使徒はみんないつも私の気に入らなかった、／各人が最後には勝手気ままを求めるにすぎないからだ。／多くの人を解放したいと思うなら、思い切って彼らに仕えるがよい。／それがどんなに危険なものかお前は知りたいのか? では、やってみるがよい。」51番「国王が望むのは善であり、扇動家の望むのも同じもの、／と人はいう。だが、彼らとて誤りを犯す。ああ、彼らもわれわれと同じ人間さ。／大衆が自分のために何も望めないことは、先刻承知のこと、／けれど、われら万人のために何かやることができる人がいるなら、それを示してくれたまえ。」52番「狂信の徒は30歳で十字架にかけよ!／欺かれた者はひとたび世間を知れば、悪党になる。」53番「フランスの悲しい運命よ、身分の高い方はとくと考えるがいい。／けれど、もっと考えねばならぬのは小市民だ。／お偉い方は滅んだ。しかし民衆から／民衆を守るのは誰か? かの地では、民衆が民衆の暴君となった。」54番「私は気違いじみた時代を体験した。時代の命ずるままに／自分も愚かなことに事欠かなかった。」55番「君侯はしばしば薄っぺらな銀めっきをした銅貨のうえに／自分の意味ありげな肖像を刻んで／長らく民衆をたぶらかした。／狂言の徒は嘘とナンセンスのうえに精神の烙印を押しつけ／試金石をもたぬ者は、それを純金だと思い込む。」56番「フランスの通りや広場に、声高く叫ぶ激烈な演説家を／あの人たちは気違いだと、人はいう。／私もそう思う。けれど、ああ、隷属の中で、英知が沈黙するとき／自由の中で狂える者といえど賢明な言葉を吐く。」57番「長い間身分のお高い方はフランスの言葉を話し、／それを流暢に話せぬ者を半ば軽蔑した。／今や民衆という民衆が、有頂天になってフランス語の片言(筆者注 *liberté, égalité* など)を話している。／権力者よ、怒ってはならぬ、あなたたちの求めたことが起こったのだ。」(WA 1, 320f.)

これらの詩の中には、一見して多くの同時代人のような、革命の自由・平等・友愛の原理や封建的圧制からの人間解放を称賛する言葉や姿勢はまったく認められない。革命の出来事は、根底において不快な、信用できな

いものとして懐疑的、拒否的、冷笑的に受けとめられている。これは革命勃発から8ヶ月から1年ほど経たときの発言であるが、彼にとってこの間の革命の経過は、およそ新時代の幕開けというものでなく、ほとんどすべての人が革命熱に浮かされた「気違いじみた時代」であり²¹⁾、革命家、即ち「自由の使徒」は結局「勝手気ままを求める」エゴイストであり、「嘘とナンセンス」に高貴な「精神の刻印」を上塗りして、大衆を惑わす「扇動家、狂信者」にすぎないとみなしている。しかし、革命家のみを批判しているのではない。フランス、ドイツを問わず、長い間民衆をだましてきた「身分の高い方、王、君侯、権力者」に対する批判もきびしい。英知を沈黙させる隷属の状況よりも、狂信者が賢明な言葉を吐く自由の状況のほうがましだともいっている。そして彼が革命家と旧制度（アンシャン・レジーム）の支配者の双方を批判する根拠は、何よりも「フランスの悲しい運命」としてみた、この革命は一つの古い専制が別の専制によって排除される政治的転覆であり、このような極端な暴力的な政変は大きな混乱を引き起こすだろうという認識にあるとあってよい。ゲーテが革命に対して最初から複雑な、一種の不信感をもって対応したのは、両方の担い手とともに信頼できぬという懐疑の念に見舞われ、二つの対極的力の抗争がもたらす無秩序、混沌の中で今後事態がどのように展開されるか明確に把握できなかったからだろう。しかし革命に無関心だったのではない。ここでシラーとの連帯成立までのゲーテの革命との関係をみて行こう。

まず彼はすでに旧制度の墮落と腐敗の内に革命の前兆を感知していたといえる。後年の回顧録だが、1785年の王妃マリー・アントワネットを利用した大がかりな詐欺事件の「首飾り事件」について、「この事件で暴露された都市、宮廷、国家の不道德の奈落に、この上もなく恐ろしい結果が幽霊のように現れて、私は長い間その姿から逃れることができなかった。」

(WA 35, 11), 「私はこの前代未聞の悪事によって王室の尊厳が揺さぶられ、いなすでに前から破壊されているのを見た。それ以後の事態の経過は遺憾ながら私の恐ろしい予感を裏書きするものばかりだった。……それから世界史上の出来事が私の精神をすっかりとらえた。」(WA 33, 261f), 「この訴訟によって引き起こされた衝撃は国家の基礎を揺るがし、王妃と上流階級全般に対する人々の尊敬を破壊した。というのも、噂に上る事柄

はどれもこれも、遺憾ながら宮廷と貴族が陥っている恐るべき墮落をはっきりさせるものばかりだったからである。」(WA 33, 129)と繰り返し述べ、この事件を革命の「不吉な前兆」(WA33, 264)といている。つまり彼は旧制度が恐るべき墮落により崩壊寸前の状態にあるのを理解していたのである。したがって革命の勃発をさほど驚かなかった、むしろ自分の旧制度に対する評価の正しさを革命勃発によって確認したともいえるのである。ただ長い沈黙の後、先のヤコービ宛書簡で「私にとっても一つの革命」といったのは、彼にとって想像を越えた激変として受けとめられたのだろう。作品としては、『ヴェニスのエピグラム』の後、1791年夏に旧制度の墮落をテーマとする、いわゆる革命文学の第1作(厳密には革命でなく革命前史)の喜劇『大コフタ』(*Der Groß-Cophta*)を書いている。この時期は革命がフランス国内で展開し、ドイツへの影響としては比較的平穏なときである。しかし革命の進展につれて、彼自身が直接革命の渦中に置かれる。それは同時代の知識人とは著しく異なる彼独自のものというべき戦争体験である。フランスの、1792年4月の対オーストリア及び7月の対プロシヤへの宣戦布告により、革命は国外へ広がったが、ゲーテも43歳にもなって反革命のプロシヤ軍重騎兵隊長カール・アウグスト公に呼ばれ、1792年8月から12月までフランスへ出征した。彼にとって革命が何よりも戦争として体験されたことは、注目すべきことである。さらにもう1度1793年5月から8月までマインツ奪還のために出陣している。因みにこの2度の体験を自伝の形で『フランス出征記』(*Campagne in Frankreich, 1820-22*)と『マインツ攻囲』(*Belagerung von Mainz, 1820-22*)に書いている。両者の中には戦争の賛美はまったく認められないし、書き方も革命・反革命のどちらの陣営にも味方せず、客観的であり、「1人称の語り手は、両極に対して外見上同じような距離を保っており、関与者としてよりも観察者として登場し、自分を行動する主体として示さずに状況を解説している。」²²⁾といえる。

この出征の時期の手紙を若干挙げれば、1792年8月18日付ヤコービ宛に、戦陣に赴く途中13年ぶりにフランクフルトの母親を訪ねた後、「私は20日月曜にマインツへ行き、それからすぐ軍隊のところへ参ります。私の母の家のベットや台所や地下室に比べると、向こうのテントや酒保はひどいも

のでしょう。特に私には貴族の罪人が死のうが、民主主義者の罪人が死のうが、別に痛痒を感じませんから。」(WA Briefe 10, 6)と、出陣への不快感を露にし、対戦の双方のいずれにも与しない態度を示している。有名なヴァルミーの戦い²⁸⁾の1週間後、1792年9月27日クネーベル宛に「この4週間私は多くのことを体験しました。出征の見本のような今回の出征は、私にいろいろと考える時間を与えました。すべてをこの目で見たこと、そしてこの重要な時期が話題に上ったとき、『そしてわれはそのことにささやかな役割を果たしたり』といい得たことはとても嬉しいことです。……敵が視界に入ったとき、物凄い砲撃が始まりました。それは20日のことでした。とうとう砲撃が行き着くところまで行くと、すべてが静かになりました。今日でもう7日間静かです。……ひどい天候とゆっくり遅れて出されるパンの不足がこの休戦状態を一層腹立たせます。」(WA Briefe 10, 25f)とか、フォクト宛(1792年10月10日)に「私たちはこの6週間の内に一生かかっても足りないほどの苦勞や困窮や不安や悲惨や危険に耐え、これらを見てきました。」(WA Briefe 10, 29f)とか、妻宛(10月15日)に「家に帰れるのがどんなに嬉しいか、とても言葉でいい表せません。私たちが耐えてきた惨めさはとても筆紙に尽くし得ません……道路が破壊され、天気がとても悪いので、人馬がどういふふうフランスから脱出できるか分かりません。」(WA Briefe 10, 31)とか、ケルナー宛(11月14日)に「不幸な出征の困窮に耐えた後、私はここの旧友ヤコービの家でまるで生まれ変わったような気持ちです。そして今やっと自分が人間であることに再び気づき始めています。」(WA Briefe 10, 40)と語っているのが、ゲーテのフランス革命体験なのである。

彼が最初から革命に同調しなかったのは、グリーヴァンクのいうように、革命の時期が彼の人生の歩みと相容れない「最も不都合な時点」に当たったからだろう、つまり「イタリアから帰った後、40歳のゲーテは生活、芸術、自然考察においてまとまりをもった、形式豊かな発展に努め……南国から持ち帰った古典主義の理想に近づいていた。その際フランス革命は彼の意図に著しく抵抗する妨害的な状況のシンボル、いな直接原因となった。」²⁴⁾のであろう。彼はもはや若い革命家に共感する、情熱的なシュトルム・ウント・ドラング人ではなく、実り多いイタリア旅行を終え、人間としてま

た芸術家として新しいアイデンティティーを得ていたのであり、それゆえ革命が彼の人間形成の妨害的要因となったことは想像に難くない。そして何よりも革命が彼にとって戦争という形で現れたところに拒否的に働いたのである。フランス出征後、1793年に革命文学第2作の喜劇『市民将軍』(*Der Bürgergeneral*)、ついで叙事詩『ライネケ狐』(*Reineke Fuchs*)、政治劇『激昂した人々』(*Die Aufgeregten*)を書くが、この2つの革命劇とも酷評を受けた²⁶⁾。ここで作品を論ずる余裕はないが、革命という厳粛な問題が喜劇の形でとらえられ、革命家が愚か者、悪党、エゴイストとして茶化されて表現されているところに、ゲーテは革命を理解していないと批判されているようである²⁶⁾。が、彼の作品の舞台はフランスでなくドイツであることに注目すべきである。

後の小説『ドイツ難民の談話』(*Unterhaltungen deutscher Ausgewanderten*, 1794/95)、叙事詩『ヘルマンとドロテア』(*Hermann und Dorothea*, 1796/97)も同様であるが、彼の革命文学の多くは革命そのものでなく、ドイツへの影響という観点から取り扱われている。そして彼自身が『年代記』(*Annalen*, 1817-1826)の中で「活動的で生産的な精神と真に愛国的な心情を持ち、自国の文学を促進している人間にとって、既存のすべてのものが転覆しながら、そこから何かよいもの、いや別のものでも生まれて来るというわずかな兆しすら感ぜられないとき、その転覆に驚きを覚えても、仕方のないことであろう。同じような影響がドイツにも及んで、気違いじみた、いな下劣な人間が権勢を握るのを腹立たしく思っても、人は彼に同意するだろう。この意味で『市民将軍』は書かれ、同じく『激昂した人々』が起稿され、それから『ドイツ難民の談話』も書かれた。」(WA 35, 24)と述べているように、革命のドイツへの波及・影響という立場がこれらの作品の執筆動機なのである。付言すれば、エッカーマンとの対話の中で「私がフランス革命の見方になれなかったことは本当だ。それはあの残虐さがあまりにも身近に起こり、毎日毎時私を憤慨させ、一方その有益な結果を当時まだ推察することができなかったからだ。同時にフランスでは必然の結果であったものと同じ場面を、ドイツでも人工的に引き起こそうと努めていることに無関心ではいられなかった。」²⁷⁾と述べている。つまり彼の認識として、革命はフランスでは必然性はあるが、ドイツ

では人工的模倣にすぎぬというのである。以前からゲーテのフランス革命に対する関係について、ワイマルの賢者は絶対啓蒙君主国の枢密顧問官、君主の忠僕（Fürstendiener）として体制側に立ち、まるでオリンポス神のように時代の出来事から超然として、暴動の原因や必然に聞く耳を持たず、保守主義や反革命の肩を持つ発言をし、さらにフランスを敵とする反革命軍の一員として戦争にも参加した。偉大な精神と芸術の持ち主でありながら、結局現実に背を向け、非政治的ドイツ人という例の古典主義像をつくりあげたなどというきびしい批判がある²⁸⁾。しかし上に述べたように、彼は決して旧制度の弁護者ではなく、革命・反革命のいずれの側にも味方しているわけではない。革命が彼の内的・外的平和を乱す要因となったこと、戦争と混乱を引き起こしている現実、300を越える小国分立の国状からいまだその必然性がないとみたドイツでの革命運動に対して拒否的態度を取ったということができるのである。

一方シラーの場合はどうか。彼もゲーテと同様にもはやシュトルム・ウント・ドラング人ではなかった。革命2ヶ月前の1789年5月にイエーナ大学の員外教授として貧しいながら定職に就き、8月にシャルロットと婚約、翌年2月に結婚、やっと生活の安定と幸福を得た。だが、毎日14時間研究と執筆に従事したという無理が祟って、1791年1月から数ヶ月病床につき、一時死去の報が流れたほどであった。この窮状を救ったのが、デンマークの皇太子アウグテンブルクからもらった3年間、千ターラーの年金である。その感謝から書いたのが、彼のフランス革命に対する回答とあってよい、『アウグステンブルク書簡』（*Augustenburger Briefe*）、彼の「政治的信条の告白」と呼んだ『人間の美的教育について』（*Über die ästhetische Erziehung des Menschen*）の草稿である。初期の段階では、彼は革命に共鳴した一人だという記述もあるが、しかし作品はもちろん手紙の中にも何の反響もなく、表だってそれを証するものは見いだせない。ボルヒマイアーのいうように、「シラーはもちろん革命の勃発を祝った作家に属してはいない。彼は恐怖政治の時期の初めまで静観の態度を取った。フランスの出来事に対して奇妙にもスフィンクスの謎のような沈黙を保った」²⁹⁾のである。シュミートも「フランスでの革命の最初の段階に熱狂的な感激で歓迎し、しかしやがて失望するにしたがい、素早く身を背けた多くの同時

代・同世代人と異なって、シラーの態度は初めから冷静であり、原則的に変わらぬ首尾一貫性を示している。」⁸⁰⁾と述べている。冷静で首尾一貫した態度を取ったのは、ヴィーゼなどの指摘するように⁸¹⁾、革命以前に彼に一定の国家観ができていたからだろう。即ち1788年11月27日付カロリーネ・フォン・ボイルヴィツ宛書簡に「自分の力を発展させる、個々の人間の魂は、全体として見られた、最も大きな人間社会よりも偉大です。どんなに大きな国家でも人間の所産であり、人間は及びがたい偉大な自然の所産です。国家は偶然の産物ですが、人間は必然的な存在です。一つの国家はただ個々の人間の力によってのみ偉大となり、尊敬すべきものになります。国家は人間の力の働き、思想の産物にすぎません。しかし人間は力そのものの源であり、思想の創造者なのです。」⁸²⁾と述べ、また1789年8月の『リュクルゴスとソロン立法』についての講義の中で、「国家それ自体は目的でなく、人類の目的がその下で実現される条件としてのみ重要なのである。そしてこの人類の目的とは、人間のあらゆる力の開発、進歩にほかならない。国家の制度が人間の内部にあるすべての力の発展を妨げ、精神の進歩を妨げるなら、その制度は、たとえ見事に練り上げられ、その種類の完全なものであろうと、厭わしく有害である。」⁸³⁾と述べている。シラーはスパルタの国家優先の制度よりもアテネの人間優先の立法を称揚する考えを確立し、その観点から革命をみていたといえるのである。

シラーの革命についての言及もかなり遅く、1792年10月15日付ケルナー宛書簡に、ミラボーの著作『教育について』(*sur l'éducation*)の翻訳を勧めながら、「彼はいわばフランス憲法の誕生の騒ぎの中でも、すでに有益な教育制度によって憲法に対し永続の芽を植えようと考えています。」⁸⁴⁾とか、11月6日同氏宛に「クロムウェルの革命」について書くように勧め、「今の時点にこそ革命についての健全な信条告白を行うのは、とても興味があります。」⁸⁵⁾とか、さらに11月26日の同氏宛に「フランスに対する戦いは来年決着がつく。たぶんドイツの地で砲弾が鳴り響くでしょう。……「世界報知」(*le Moniteur*)を読んで以来、私はフランス人からもっと多くの期待を寄せています。……この新聞の中に国民公会の審議のすべてが詳細に載っていて、フランス人の長所も短所も知ることができます。」⁸⁶⁾などと述べているのが最初の言及であるが、彼はフランス政府の新聞を購

読んで情報を得、革命の動きに絶えず関心をもっていたことが分かる。そしてゲーテのように距離を保っているのではなく、多少好意的な態度のようにも思われる。12月7日に彼はヴィルヘルム・フォン・フンボルトから、「フランス革命に対する私のこのような愛着にもかかわらず、フォルスターが今の時点で突然まったく公然とフランス側に移って、職務に就いたことを許すことができません。……彼は本当に恩恵を感謝しなくてはならぬ選帝侯に対し、明らかに自分より弱い立場にある時期に、不誠実であるのは不道徳で卑しく思われます。彼の友人たち、特にフーバーがなぜ引き止めなかったのか理解できません。……カロリーネはあなたがパリへ旅行する気がないかと手紙に書いています。もしパリが平和で、あなたが私たちと一緒に連れて行って下さるなら、早速お供します。私も革命の始まりから国がどんな風に変ったかを知るために、パリをもう一度見たいのですが。」⁸⁷⁾という手紙をもらった。フォルスターはフランスのキュスチヌ將軍のマインツ占領(10月21日)後、自分の信念で11月5日にジャコバンクラブ「自由と平等の友の会」に入会し、まもなくマインツ臨時行政委員会副代表となり、革命家に転身したのだが、フンボルトはフォルスターのこの政治的行動を道義的に許せぬ忘恩的な振舞だと批判しているのである。そしてシラーにパリ行きを勧めているのは、もしかするとシラーがクロップシュトックと同様に、『群盗』(Die Räuber)によりフランス名誉市民に選ばれたことを知っていたからかも知れない。(奇妙にもフランス政府の文書は直接送られず、キュスチヌ將軍に託されたので、回り回って5年半後の1798年2月にシラーの手元に届いた。しかしその記事が「世界報知」に載っていたので、周囲の人は知っていた。)⁸⁸⁾そしてシラーは1792年12月21日ケルナー宛に「フォルスターの振舞はもちろん誰からも認められないだろう……私は彼がこの問題から恥と後悔をもって身を引くと予見しています。マインツの人たちには何の興味もありません。というのも、彼らのすべての行動は健全な原則よりもむしろ愚かしい自己顕示の病的欲望を示しています……私に必要なとき、うまくフランス訳をやってくれる人を知りませんか。国王の係争事件に割り込んで、これに関する陳情書を書かずにはいられません。」⁸⁹⁾と述べ、マインツ革命を批判し、ルイ16世の裁判に憤激を表している。さらに国王の処刑(1月21日)後の1793

年2月8日同氏宛に「君はフランスの問題についてどう思いますか。私は実際国王のための文書を書き始めていましたが、それを見ながら、気分が悪くなりました。今もまだそこに置いてあります。私は2週間前からフランスの新聞を読むに耐えませんが、この見下げ果てた悪逆の輩に私は嘔吐を催します。」⁴⁰⁾と述べている。シラーはこの時点から明らかにフランス革命に対して批判的態度を取ったといえる。それは親友フリードリヒ・ウィルヘルム・フォン・ホーヴェンの証言 (*Gespräch mit Friedrich Wilhelm von Hoven. Ludwigsburg, 1793/94*) や『アウグステンベルク書簡』からもはっきり理解できる。

前者に「フランスの自由運動に私はとても関心をもっていたが、シラーはその味方ではなかった。彼はより幸福な将来への明るい展望があると思っていなかった。彼はフランス革命をただフランスの悪政、宮廷や貴族の贅沢、フランス国民の退廃の自然の結果であり、不平不満の野心的で熱狂的な人たちが、社会状勢を利用して利己的な目的を果たそうとするものであり、英知の産物ではないとみなしていた。なるほど以前に書物や聡明な思想家の頭の中にしかなかった多くの真実の偉大な理念が、公然と口にされるようになったことは認められるが、しかし本当に幸福をもたらす社会制度をつくるには、まだまだ十分とはいえない。結局このような制度の基礎とならねばならぬ原理そのものがまだ十分に発展していない。というのも、今日まで、と彼はちょうど机の上にあったカントの『(純粹) 理性批判』を指さしながら、その原理はまだここにしかない。第2に重要な問題は、民衆もこのような制度に成熟していなくてはならぬのだが、それがまだあまり、いやまったくできていないことだ。だから、フランス共和国はその成立のときと同じように、急速に再び消滅するだろう。共和制は早晩無政府状態に陥るだろう。そしてフランス国民の唯一の救いは強力な人物の出現だろう。どこから現れようとも、その人物は嵐を鎮圧し、再び秩序を回復し、政治のたずなをしっかりと握るだろう。たとえ彼がフランスのみならず、他のヨーロッパの一部の独裁者となることがあっても、といった。」⁴¹⁾と語られている。

後者の1793年7月13日付長文の書簡には、特に鮮明に革命についての考えが述べられているが、その一部を挙げると「才気にあふれ、勇気に満ち、

長年お手本としてみられていた国民は、現在の社会状況を暴力をもって捨て去り、自然状態に引き戻し始めました。この自然状態にとっては、理性が唯一絶対の立法者です。この大きな訴訟はその内容と結果のゆえに人間と呼ばれるすべての者に深く関わるものなので、それだけにその審議の方法について、すべての主体的思想家は特に関心をもたなくてはなりません。以前にはただ強者の権利と因襲によってのみ決定された問題が、今や純粹理性の法廷の前に提出されています。少なくともそれはあたかもいろいろな原理にしたがって最終の判決が下されるように思われます……神聖な人権の中に身を置き、政治的自由を得ようとするフランス国民の試みは、ただ同国民の無能と下品さを露呈し、この不幸な民族だけでなく、ヨーロッパのかなりの部分を一緒に、そして全世紀を野蛮と隷属状態に押し戻してしまいました。……」そしてこの革命は「人類が後見の力からまだ脱していないこと、理性の自由な統治は、獣性の残忍な力を抑えることができないところでは、まだ時機尚早であること、まだ人間的自由の多くを欠いている者にはまだ市民的自由に成熟していないことを」証明した。「人間の姿は行為の中に現れるものです。現代の鏡に映った映像はどんなものでしょうか。一方にはこの上なく腹立たしい野蛮化、他方にはこれと対照的な無気力、即ち人間本性の陥る二つの最も悲しむべき過ちが一つの時代に合一しています。下層階級には市民的秩序のきずなを解かれ、動物的満足の手にも負えぬ狂暴さで奔走する、粗野で無法な衝動しか見られません。……他方文明化された階級は無気力、精神の脆さ、人格の墮落というなお一層厭わしい姿を見せています。」⁴²⁾ と述べている。シラーはフランス革命を啓蒙主義の所産とみて、「強者の権利や因習」から「純粹理性の法廷」への問題解決の基準の変化、「神聖な人権」に基づく「政治的自由」の獲得という点から、理念としては肯定しているといえるが、しかし実践として革命家を国王殺しの「見下げ果てた悪逆の輩」、貴族階級をそれよりもっとひどい墮落の徒として、拒否的態度を鮮明にしている。そして何よりも上層・下層両階級の間人性に大きな疑念を抱き、人間としての自由を欠いている者に、市民的自由など期待できない。したがって共和制は時機尚早だというのである。なるほど彼の予言した通り、共和制は無政府状態に陥り、やがてナポレオンの軍事独裁が招来する。

以上、ゲーテとシラーの連帯成立までの両者のフランス革命との関係についてみてきたが、二人の認識は革命を大きな混乱とみ、革命・反革命のいずれにも加担せず、双方の担い手の人間性に大きな疑問をもつ点においてほぼ一致しているといえる。ただゲーテの場合、ドイツの社会がいまだ成熟していないとするのに対し、シラーは人間そのものが成熟していないとしているところに若干の見解の相違がある。ところで、プューリッツは「ゲーテとシラーの連帯——いわゆるワイマル古典主義の問題の解明のために——」(*Der Bund zwischen Goethe und Schiller. Zur Klärung des Problems der sogenannten Weimarer Klassik*)の中で、両詩人の1794年の連帯の成立について、それ以前の両者の対立の状況からすれば急変といってよい。しかしこれを可能にした二人の結合は、これまでいわれていた両詩人間の「人間としての近しさ、精神的一致、芸術上の親近性」でなく、「時代に対する共通の戦線態勢から」(aus gemeinsamer Frontstellung gegen die Zeit)生まれたものであり、「ゲーテとシラー連帯は友情関係でなく、相互援助の行為、活動のための協力である。」と述べている⁴³⁾。つまりゲーテ・シラーのワイマル古典主義は現実の状況から遊離した単なる個人的結合でなく、時代との関わりから生まれたというのである。これは重要な指摘であり、そしてこの時代に対する両者の共同戦線とは、プューリッツはまったく触れていないが、フランス革命によって生じた諸状況にはかならない。ワイマル古典主義はそれゆえゲーテ・シラーの時代批判を紐帯として成立しているといえるのである。さらにイタリアの研究者バイオニーはこれを踏まえてドイツ国内の状況に注目し、ワイマル古典主義は「バーゼル条約」(1795-1805)によって保証された平和の10年と奇しくも一致し、この戦乱の中のいわば「平和のオアシス」の状況がその成立・形成の前提であり、ワイマル古典主義はまさに当時の政治的・経済的統一を欠いたドイツの小邦分立主義 (Partikularismus) という国状の中で「全人類のために実現できる世界文学」として構想されたものであるという注目すべき見解を出している⁴⁴⁾。

ここで触れる余裕はないが、プューリッツの指摘とともに、これまでワイマル古典主義がややもすればその超時代的性格を強調されて、時代から遊離した形でとらえられ、それゆえ平板・硬直化されていたものを、時代

との関わりからダイナミックにとらえる観点を示したものとして、興味深いものである。本稿からも両詩人が決して時代に背を向け、象牙の塔に閉じ込めたのでなく、それぞれに現実と対決していたことが分かるだろう。

注

- 1) Vgl. *Wörterbuch der Literaturwissenschaft*/hrsg. von Claus Träger. 1. Aufl. Leipzig: Bibliographisches Institut. 1986. S. 264ff.; *Handlexikon zur Literaturwissenschaft*/hrsg. von Dieter Krywaski. 2., durchges. Aufl. München: Ehrenwirth 1976. S. 218ff.
- 2) *Befreiungskriege. Erläuterungen zur deutschen Literatur*/ hrsg. von Kollektiv für Literaturgeschichte. 7. Aufl. Berlin: Volks und Wissen 1976. S. 13f.
- 3) *Deutsche National-Literatur*/hrsg. von J. Kürschner. Bd. 47. Klopstocks Werke 3. Berlin und Stuttgart o. J., S. 177.
- 4) ebenda. S. 181.
- 5) ebenda. S. 188.
- 6) *Die französische Revolution im Spiegel der deutschen Literatur*/hrsg. von Claus Träger. Leipzig 1979. S. 33.
- 7) Vgl. Gerhard Schulz, *Die deutsche Literatur zwischen Französische Revolution und Restauration*. Erster Teil. München 1983. S. 121.
- 8) *Deutschland und die Französische Revolution: 1789-1806*/hrsg. von Theo Stammen und Friedrich Eberle. Darmstadt 1988. S. 346.
- 9) ebenda. S. 16.
- 10) Träger, a. a. O. S. 300f.
- 11) ebenda. S. 302.
- 12) Gonthier-Louis Fink, Wieland und die Französische Revolution. In: *Deutsche Literatur und Französische Revolution*. Göttingen 1974. S. 2.
- 13) Christoph Martin Wieland, *Meine Antworten. Aufsätze über die französische Revolution 1789-1793*/hrsg. von Fritz Martini. Marbach 1983. S. 8.
- 14) Gert Ueding, *Klassik und Romantik. Deutsche Literatur im Zeitalter der Französischen Revolution 1789-1815*. Hamburg 1987. S. 33.

- 15) ウィーラントとフランス革命について, Vgl. Gonthier-Lois Fink, a. a. O. S. 5-38; Benno von Wiese, *Friedrich Schiller*. 4. durchges. Aufl. Stuttgart 1978. S. 451ff.
- 16) Brief an Heyne vom 30. Juli 1789. *Georg Forsters Sämtliche Schriften*/hrsg. von der Akademie der Wissenschaft der DDR. Berlin 1981. Bd. 15. S. 319.
- 17) Brief an F. H. Jacobi vom 8. Dezember 1789. ebenda. S. 380.
- 18) Brief an die Schwester vom 19. od. 20. Juni 1792. Träger, a. a. O., S. 147.
- 19) Brief an Wackenroder vom 28. Dezember 1792. ebenda. S. 376.
- 20) Hegel. Vorlesungen über die Philosophie der Geschichte. In: Hegel, *Sämtliche Werke*/hrsg. von Hermann Glockner. Stuttgart 1928. Bd. 11. S. 557f.
- 21) 54番の詩の解釈で, クラウス (Werner Krauss, *Goethe und die Französische Revolution*. In: *Goethe-Jahrbuch*. Bd. 94, 1977. S. 131f.) は, 主語の ich がゲーテ自身に関わり, 彼も革命勃発直後一緒にその誘惑に乗ったというのか, あるいはこの ich は作者でなく, 非人称の man の意で, ほとんどすべての人が革命の幻想に襲われたという両様の意味があるといっている。ディーツェ (Walter Dietze, *Libellus Epigrammatum*. In: *Ansichten der deutschen Klassik*/hrsg. von Hermut Brandt und Manfred Beyer. Berlin und Weimar 1981. S. 199) も, 両者のヴァリエーション, 相互の重なり合いがあるとみているが, ゲーテに革命を肯定する発言がないので, 後者の意味が強いと思われる。
- 22) Gisela Horn, *Goethes autobiographische Schriften Kampagne in Frankreich und Belagerung von Mainz*. ebenda. S. 236.
- 23) 1792年9月20日ゲーテは「今日, ここから世界史の新しい時代が始まる。君たちはそこに居合わせたということが出来る。」(WA 33, 75) という有名な言葉を語った。
- 24) Karl Griewank, *Goethe, die Französische Revolution und Napoleon*. In: *Dem Tüchtigen ist diese Welt nicht stumm*/hrsg. von der Friedrich-Schiller-Universität. Jena. o. J. S. 142.
- 25) Vgl. Emil Staiger, *Goethe*. Zürich 1956. Bd. 2, S. 90.
- 26) Vgl. Hans Mayer, *Goethe*. Frankfurt 1973. S. 35f.
- 27) Gespräch mit Eckermann vom 4. Januar 1824. In: Johann Peter Eckermann

- mann, *Gespräche mit Goethe*/hrsg. von Regine Otto. München 1984. S. 472.
- 28) Vgl. Gerhart Schulz, a. a. O. S. 128.
- 29) Dieter Borchmeyer, *Höfische Gesellschaft und französische Revolution bei Goethe*. Kronberg/Ts. 1977. S. 285.
- 30) Gerhard Schmid, *Friedrich von Schiller. Bürger von Frankreich*, Weimar o. J. S. 5.
- 31) Benno von Wiese, *Friedrich Schiller*. Stuttgart 1978, 4. Aufl. S. 346f und 455ff. Elizabeth M. Wilkinson/L. A. Willoughby, *Schillers Ästhetische Erziehung des Menschen*. München 1977. S. 20f.
- 32) Brief an Karoline von Beulwitz vom 27. 11. 1788. In: *Schillers Briefe*/hrsg. von Erwin Streifeld u. Viktor Zmegac. Königstein/Ts. 1983. S. 131.
- 33) *Schillers Werke*. Nationalausgabe/hrsg. von Karl-Heinz Hahn. Weimar 1970. Bd. 17. S. 423.
- 34) Brief an Körner vom 15. 10. 1792. In: *Schillers Briefe über die ästhetische Menschen*/hrsg. von Jürgen Bolten. Frankfurt 1984. S. 94.
- 35) Brief an Körner vom 6. 11. 1792. ebenda. S. 95.
- 36) Brief an Körner vom 26. 11. 1792. ebenda. S. 96.
- 37) Brief von W. v. Humboldt vom 7. 12. 1792. ebenda. S. 96f.
- 38) Schmid, a. a. O. S. 7ff.
- 39) Brief an Körner vom 21. 12. 1792. Bolten, a. a. O. S. 98.
- 40) Brief an Körner vom 8. 2. 1793. ebenda. S. 98.
- 41) Nationalausgabe. Schillers Gespräche, Weimar 1967. S. 179f.
- 42) Bolten, a. a. O. S. 39ff.
- 43) Hans Pyritz, *Goethe-Studien*. Hrsg. von Ilse Pyritz, Köln 1962, S. 41.
- 44) Giuliano Baioni, „Märchen“ — „Wilhelm Meisters Lehrjahre“ — „Hermann und Dorothea“ In: *Goethe-Jahrbuch*. Bd. 92. Weimar 1975. S. 73ff.

ゲーテからの引用は、*Goethes Werke*, hrsg. im Auftrage der Großherzogin Sophie von Sachsen. Weimar 1887ff. (Weimarer Ausgabe) による。

Weimarer Klassik und die französische Revolution

—Die Entstehung des Bundes zwischen Goethe und Schiller—

Masahiro YOSHIHARA

Der Zeitraum, den die Weimarer Klassik umfaßt — vom Beginn der italienischen Reise Goethes (1786) bis zu Schillers Tod (1805)—, fällt mit jener Phase revolutionärer Ereignisse in Frankreich und ihren Folgen in Europa zusammen. Der Beginn der Revolution wurde von vielen deutschen Dichtern, Philosophen und Historikern mit Wohlwollen, manchmal mit Enthusiasmus begrüßt. Wir begegnen den positiven Urteilen von Klopstock in Hamburg, Kant in Königsberg, Wieland in Weimar, Forster in Mainz und a. Der alte Hegel hat die Stimmung der Revolutionsbegeisterung mit den folgenden Worten ausgesprochen: „Es war. . . ein herrlicher Sonnenaufgang. Alle denkende Wesen haben diese Epoche mitgefeiert. Eine erhabene Rührung hat in jener Zeit geherrscht, ein Enthusiasmus des Geistes hat die Welt durchschauert.“

Aber im Unterschied zu den meisten bedeutenden Vertretern standen Goethe und Schiller abseits. Von Anfang an war Goethe skeptisch und zurückhaltend. Er verstand zwar schon in der Halsbandaffäre (1785) die Unhaltbarkeit des Ancien régime, doch er empfand vor allem die Revolution als eine ungeheure Störung, denn er hat bei seinem Aufenthalt in Italien von 1786 bis 1788 eine neue Identität gewonnen und sich dem Ideal des Klassischen genähert. Und er erfuhr die Revolution als militärisches Geschehen und als Zerstörung des gesellschaftlichen Friedens, indem er zweimal am Feldzug gegen das revolutionäre Frankreich, 1792, und zur Wiedereroberung von

Mainz durch die preußischen Truppen, 1793, teilnahm. Und er wünschte auch nicht, den revolutionären Umsturz auf Deutschland zu ertragen.

Schiller gehört auch nicht zu den Dichtern, die den Ausbruch der Revolution gefeiert hatten. Bis zu den ersten Anfängen der Terror-Epoche hat er eine abwartende Haltung eingenommen. Seit der Hinrichtung des französischen Königs zeigte er aber sich unmißverständlich ablehnend: „Ich kann seit 14 Tagen keine franz. Zeitung mehr lesen, so ekeln diese elenden Schindersknechte mich an.“ Besonders in den „Augustenburger Briefen“ gibt er eine klare Antwort auf die Revolution. Darin äußert er, daß derjenige noch nicht reif ist zur bürgerlichen Freiheit, dem noch vieles zur menschlichen fehlt. So denkt er, daß die Befreiung der Bürger die menschliche innere Freiheit voraussetzt.

Für Goethe und Schiller war die Revolution, die einen unglücklichen Krieg und einen schrecklichen Terror herbeiführte, ein Irrweg. Hans Pryritz spricht in seinem Aufsatz mit Recht, daß der Bund zwischen Goethe und Schiller nicht aus der Freundschaft der beiden so verschieden Dichter, sondern allein „aus gemeinsamer Frontstellung gegen die Zeit“ entsteht. Und man kann sagen, daß diese Frontstellung gegen die Zeit auf der Erkenntnis der beiden von den Verhältnissen der französischen Revolution beruht. Diese Abhandlung untersucht den Bund zwischen den beiden klassischen Dichtern aus der Sicht der Einstellung beider zur Revolution.